



祭式摘要

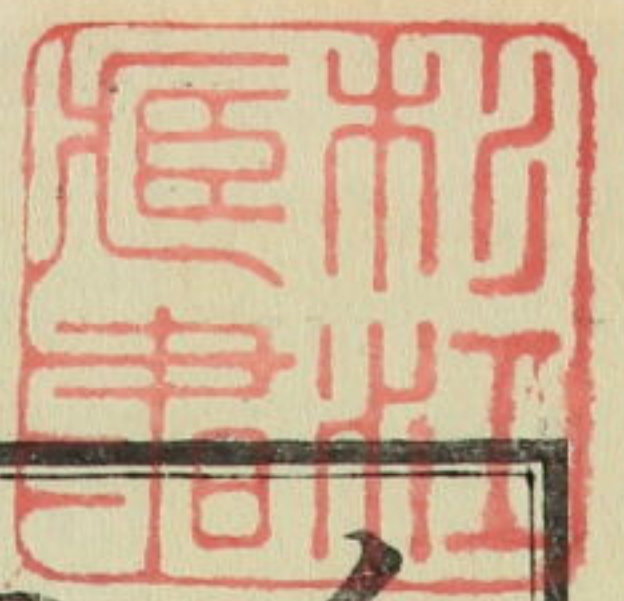
木野戸勝隆著

特別
イ 4
3163
160





生員  
14  
3163  
160



Handwritten text in cursive style (sōsho) within a rectangular border, consisting of approximately 15 vertical columns of characters.



のちまたのつち事どもに  
はきしはくまゝに  
てはとまをくひて  
ともあるはち  
さればこれ  
のちまたは

れしはくまゝに  
てはとまをくひて  
のちまたは  
はきしはくまゝに  
てはとまをくひて  
のちまたは



らしきまぬひにせられしハカ  
 ぬてあひ口をく思ひこ  
 りしかきし妙をちりこ  
 こちのせらるるりそ妙よるこ  
 ひとくせらるるきこてはるるたむ  
 明治十七年二月 山田有年記

木邨嘉平刻



祭式摘要

山田 有年 閱

木野戸勝隆 著

世にある事の中。神祭るをせり。いとむれ  
 もきことなれば。その作法をとりさむこと  
 いた。さやにからぬわざにして。かつはれの  
 があづりりしとぬことなる字。平田ぬしの  
 せちなるすゝめ字いなとがてよ。皇典講究  
 所にて教開らるゝを。かたはらにて見聞は



るまゝのおほかさをかかゝむ。なほくはし  
 からむおとゞもは。本所にて物せらるべし  
 きば。そのふくのいづるをまちてしりたま  
 ひねどす。

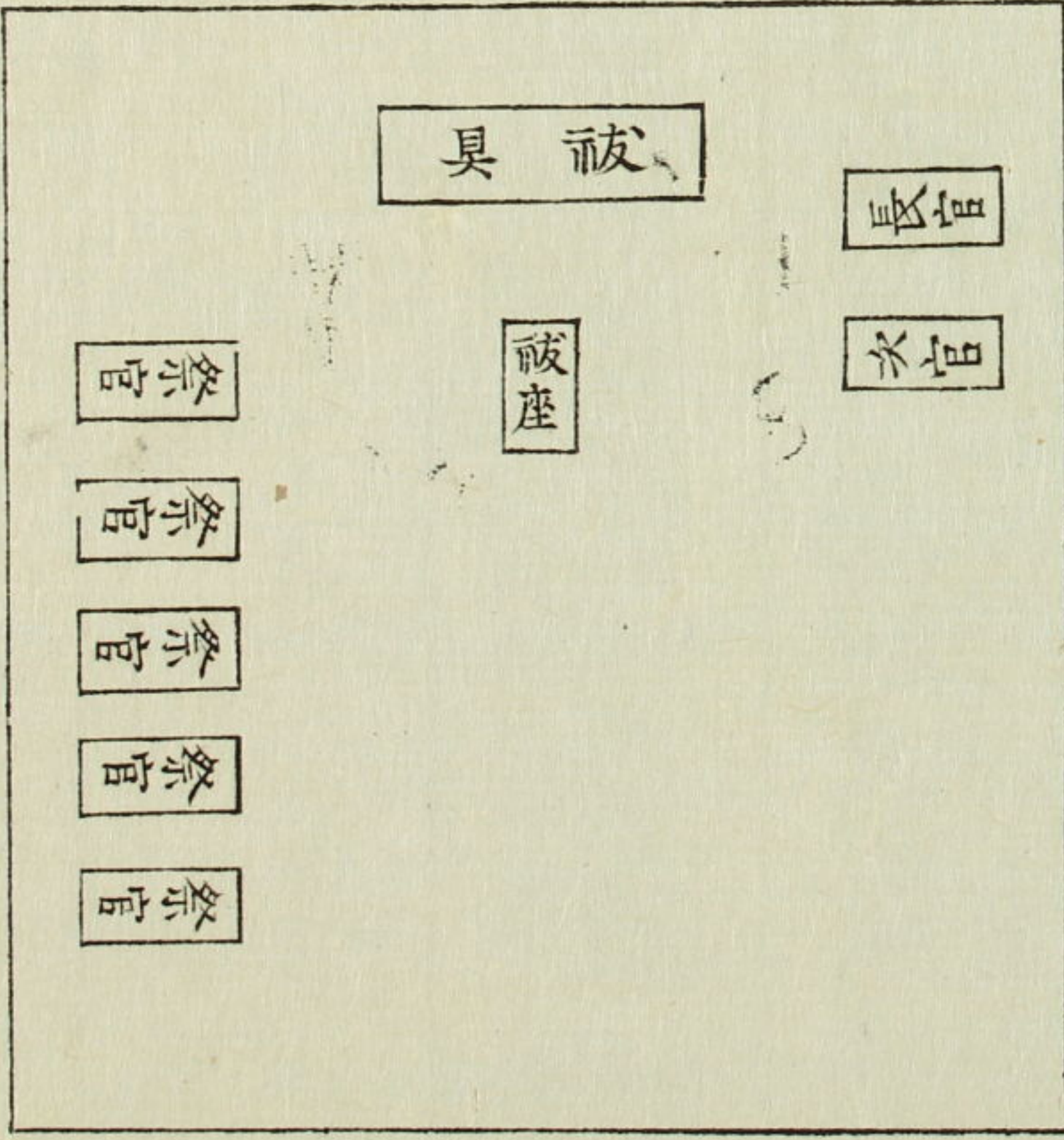
○大祭式

一年一度の恒例祭をいふ。月次臨時乃  
 中小祀をも。此に倣ひて行ふべし。

先長官以下祓殿ノ座ニ著ク

祭典執行ふべき時刻になれば。先づ長官を始  
 めて。祭式  
 ○祓殿裝飾著座ノ圖

に預るべ  
 さ人々皆  
 祓殿に著  
 座をるな  
 り。祓殿は。  
 祓式を行  
 ふ殿舎を  
 いふ。もし  
 そき無く  
 は。庭上に

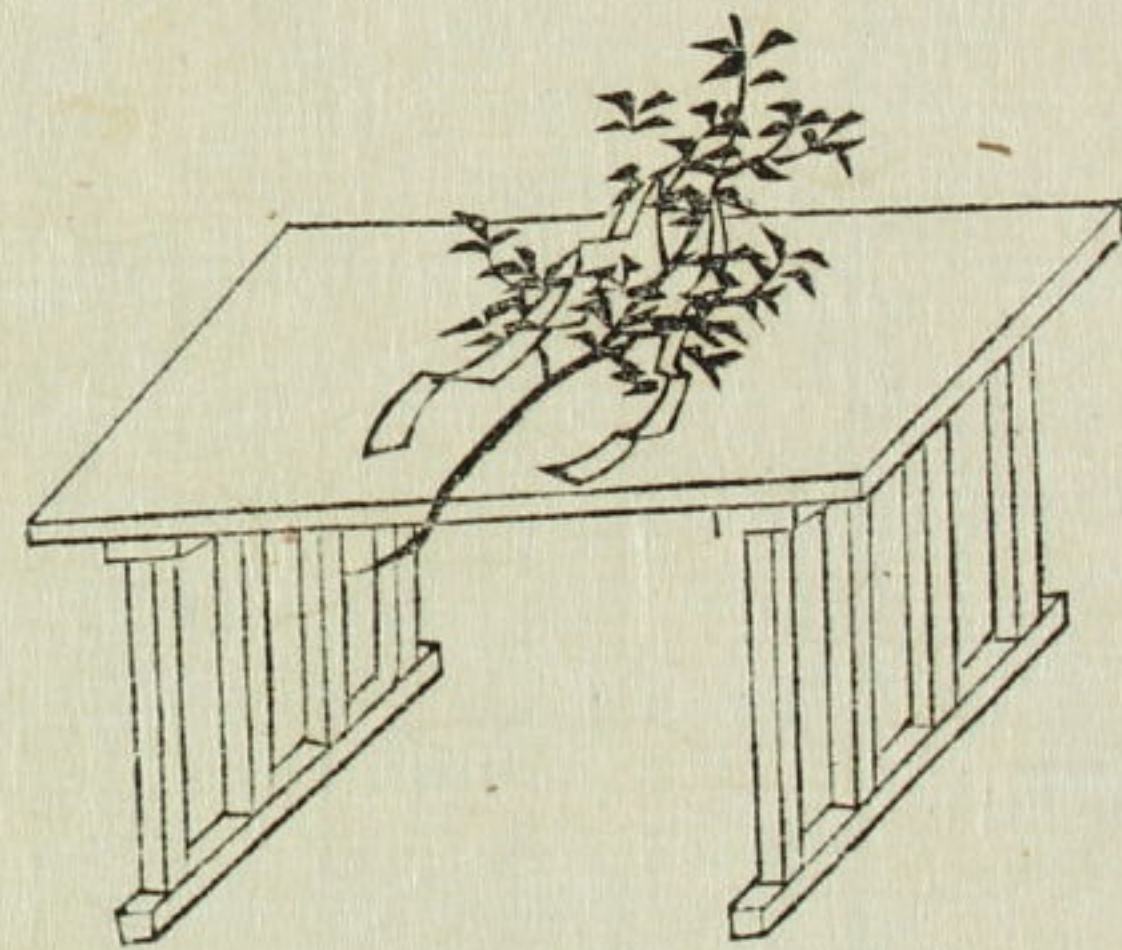




幄或は幕と張廻らして假に其所を定むべし。  
 雨儀にハ。拜殿を假用ふるも然るべし。  
 祓具祓座等は。豫め儲置け。事畢らば取除  
 くべし。

祓具

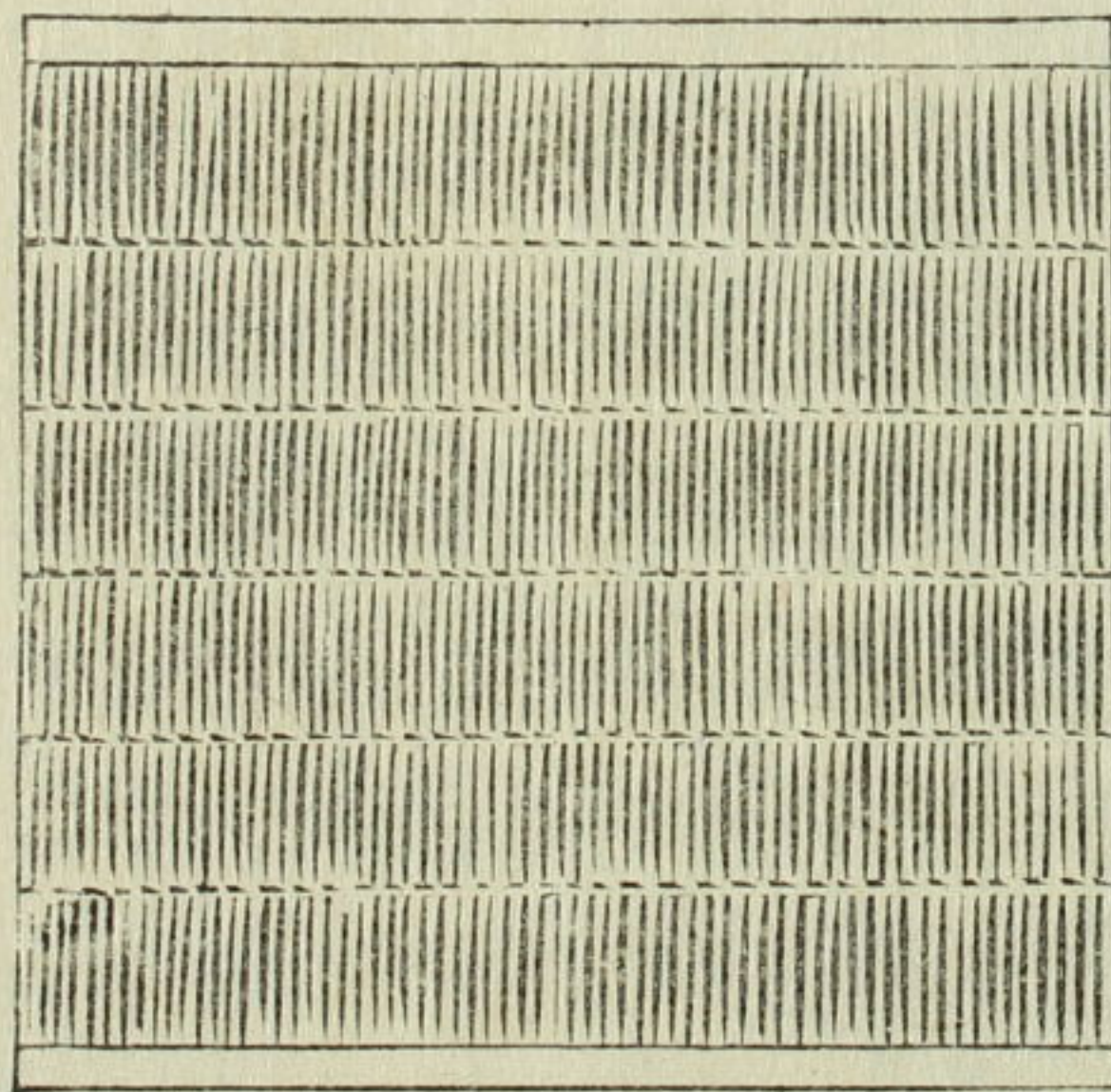
之圖



榊枝長凡二  
 尺五寸位木  
 綿麻をつく

祓座

之圖



縁は白の  
 麻又は木  
 綿にてす  
 べし凡三  
 尺位

次 主典祓ノ詞ヲ讀ミ賢木ノ枝ヲ取テ祓フ

祓事を主る祭官を祓主といふ。昔座了れば。祓  
 主一揖して座を起ち。常ハ起つ時ハ左よりすれど



も。起居進退とも。上座の祓座乃前より進みて  
 方ある膝を後よすべし。三ツ。座の上に著き。一揖し。懷  
 中なる祓詞を取出し。持添へて。二拜して。傍  
 傍ふ。祓詞を左傍にて開き。向け。他ふ見えざる  
 やう。正面へ捧けて。音聲明亮に讀むべし。讀了  
 して。右傍にて卷き。二拜して。懷中にし  
 手を二つ拍ち。一拜して。案上なる  
 榊枝を取り。一揖して。膝退し。三ツ。起ちて一揖  
 し。先づ長官の座前に著き。居。榊枝と持替へ。左  
 右左と打振て祓ひ。次に次官。次は祭官一同

を祓ひ了りて。榊枝とバ使部をして撤却せし  
 む。海川流しすて。さて本座に復して。一揖す。

始に取る時の左手を上  
 し。右手を下より少し左方  
 へ斜よむ

榊枝ヲ  
 取持ツ  
 圖



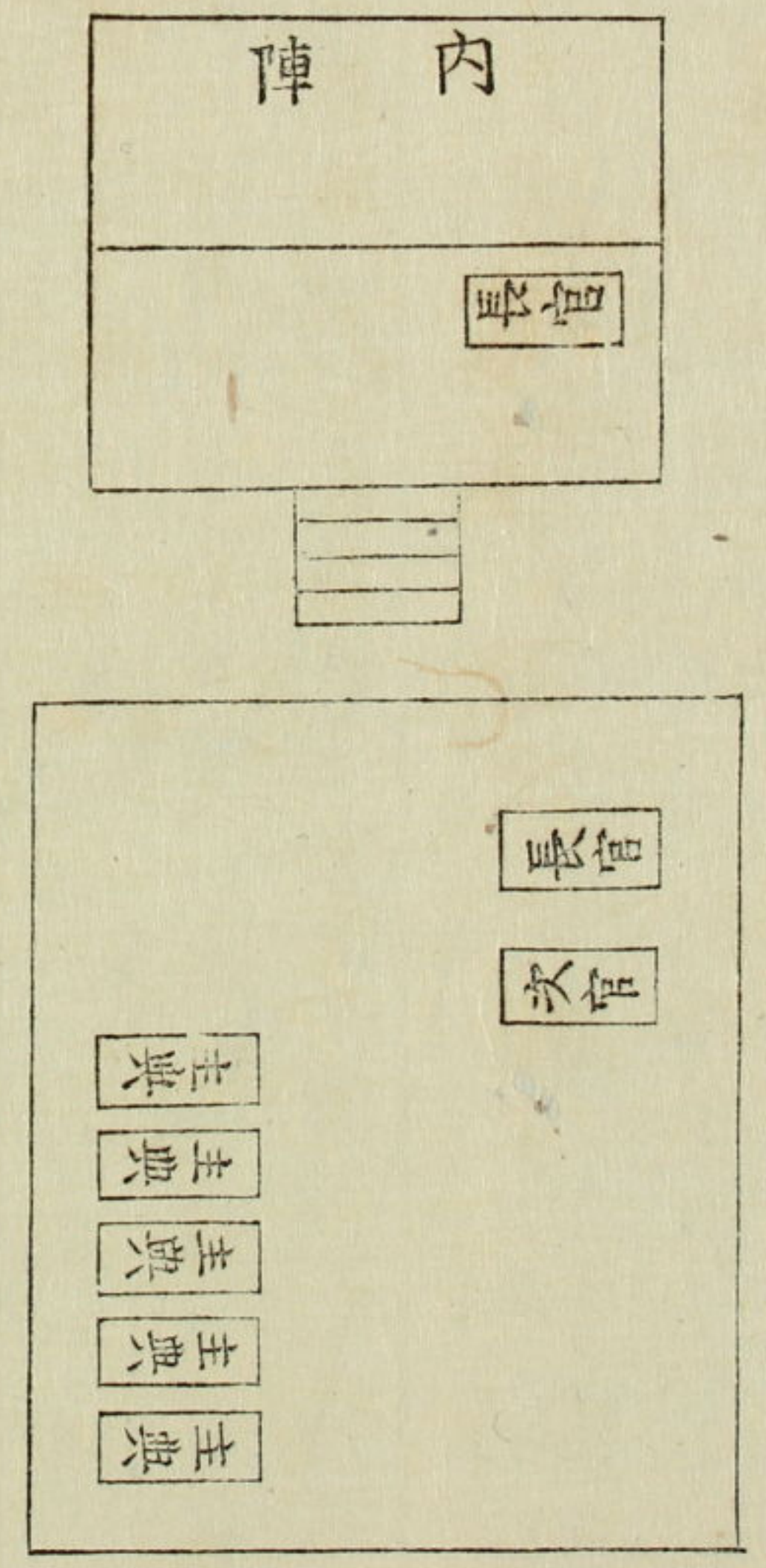






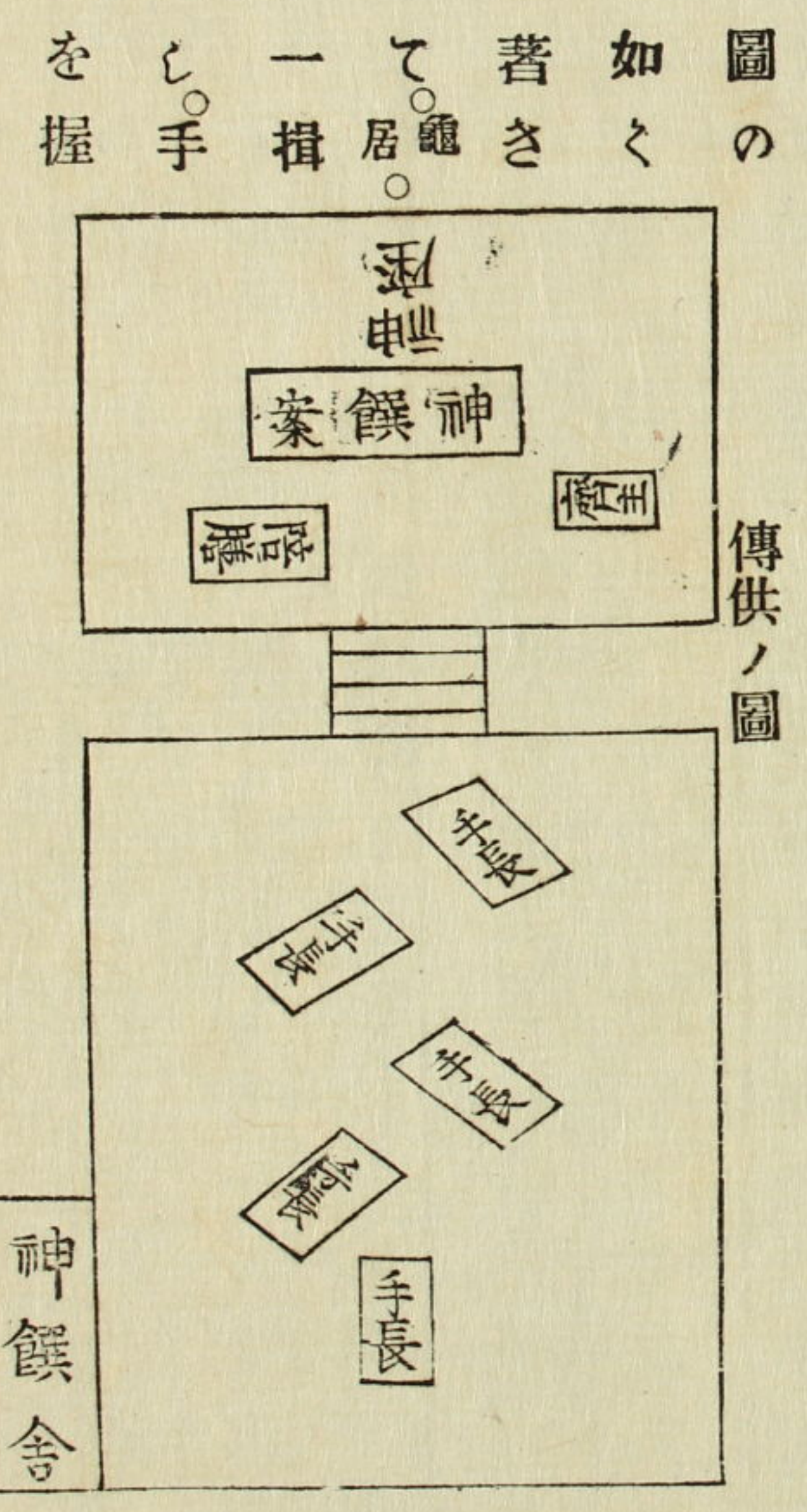
手を二つ拍ち。膝行して進む。御扉を左右へ開  
 此の間諸員皆頭を一拜し。一揖して御扉の  
 下へ退き。座して一揖し。齋主の座を起  
 手。此の間諸員皆頭を一拜し。一揖して御扉の  
 下へ退き。座して一揖し。齋主の座を起  
 手。此の間諸員皆頭を一拜し。一揖して御扉の  
 下へ退き。座して一揖し。齋主の座を起

神前  
 著座  
 ノ圖



次  
 次官以下神饌ヲ傳供ス  
 此間奏樂

次官以下手長の者。順次よ一揖して座を起ち



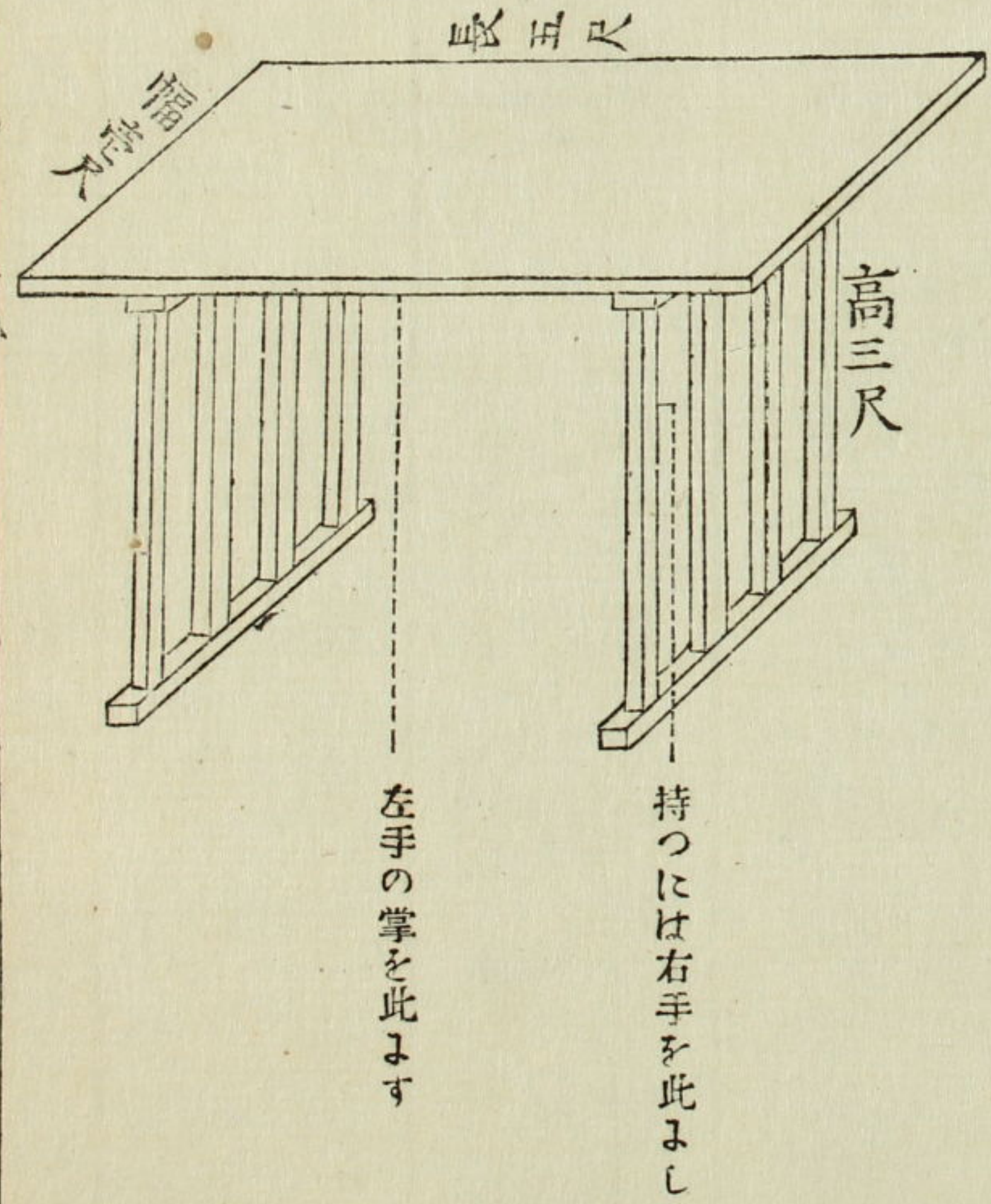
圖の  
 如く  
 著さ  
 て。龜  
 居。一  
 揖。し。  
 手。を  
 握



り。指の方と上より。甲の方を下にして。膝前より。指の方と下けて居るべし。御饌掛の者。神饌舍より順次に運び出す神饌を。次々に受取渡し。次官即ち陪膳。御饌按れ上に獻るなり。御饌案と先第一に受取渡しして。神饌舍間遠なれば。手長の人々起ちて運ふも苦からぬども。神前よては。すべて座したるまへにて。少々斜に向き合ひて受取り渡しすべし。階下の人は。勿論昇りも一人少なくて。座の距離をれば。膝行すべし。さて受取時渡せし後。共一揖すべし。陪膳ハ。一臺獻るご

ごよ一拜はべし。手のひらをバ。献り了らば各本座より復す神饌傳供の間音楽を奏す

八脚高机



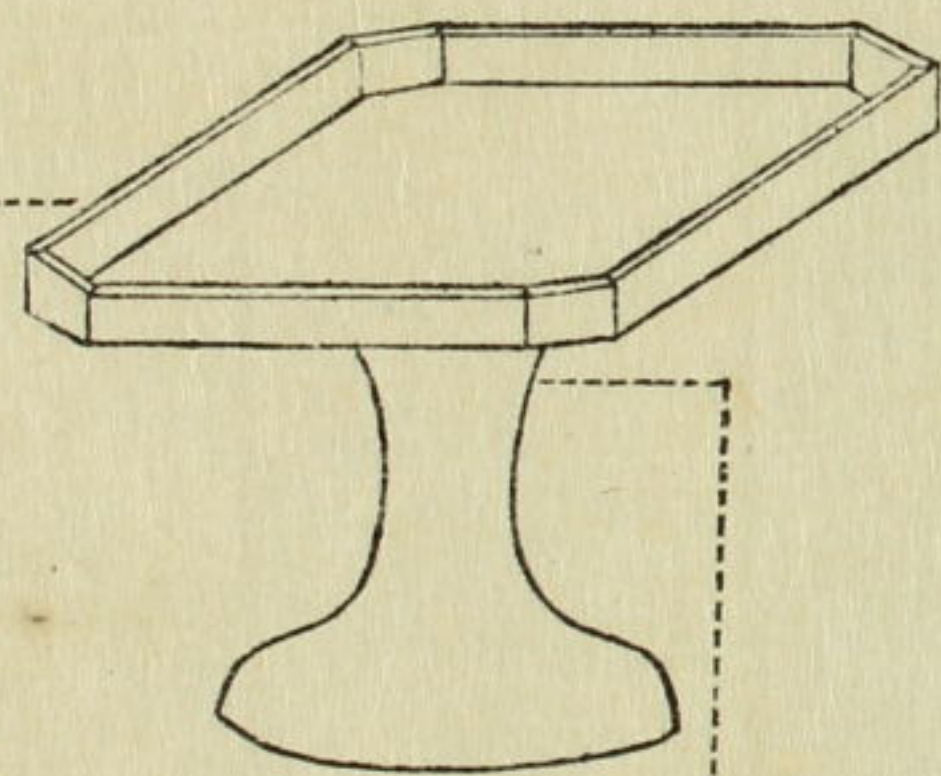
神饌器具ノ圖

左手の掌を此よす

持つには右手を此よし



同



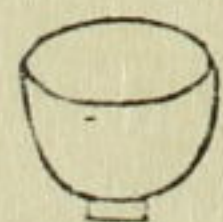
左の梅指食指してあこまもつ

右手きてあこまもつ



盆

高二寸三分

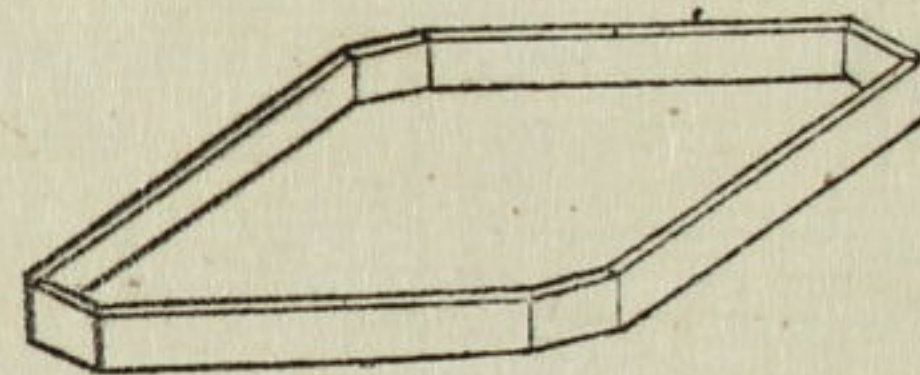


耳玉器



同

折敷  
八寸五分  
或八寸

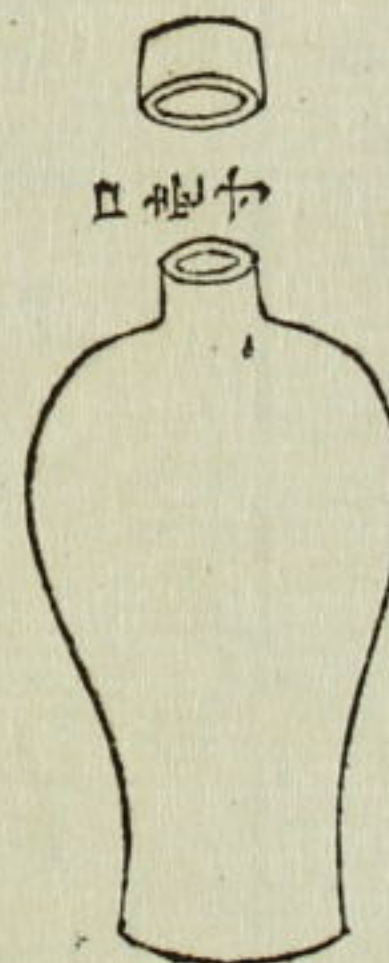


盃



瓶子

高七寸



越川

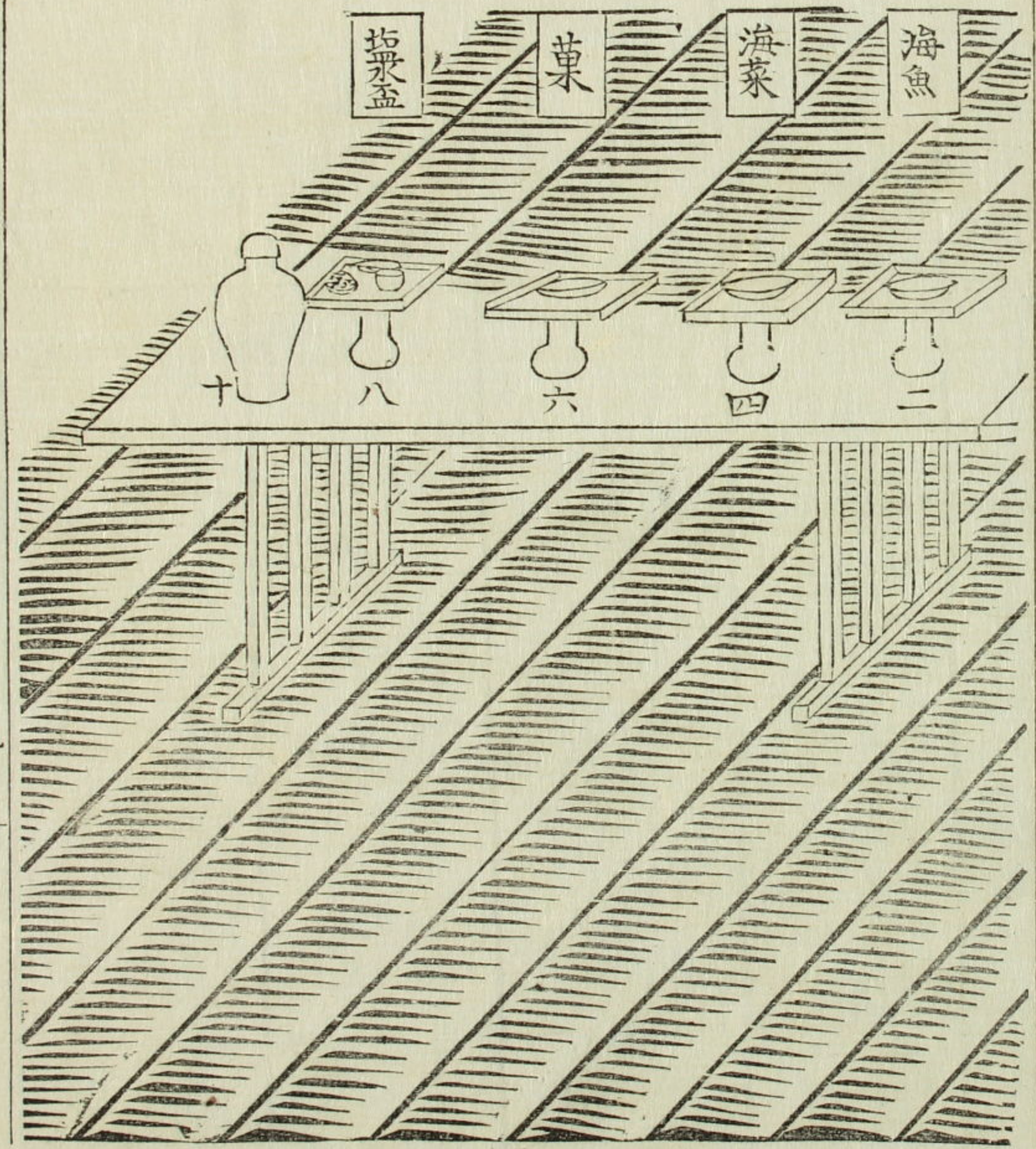
高坏



越川

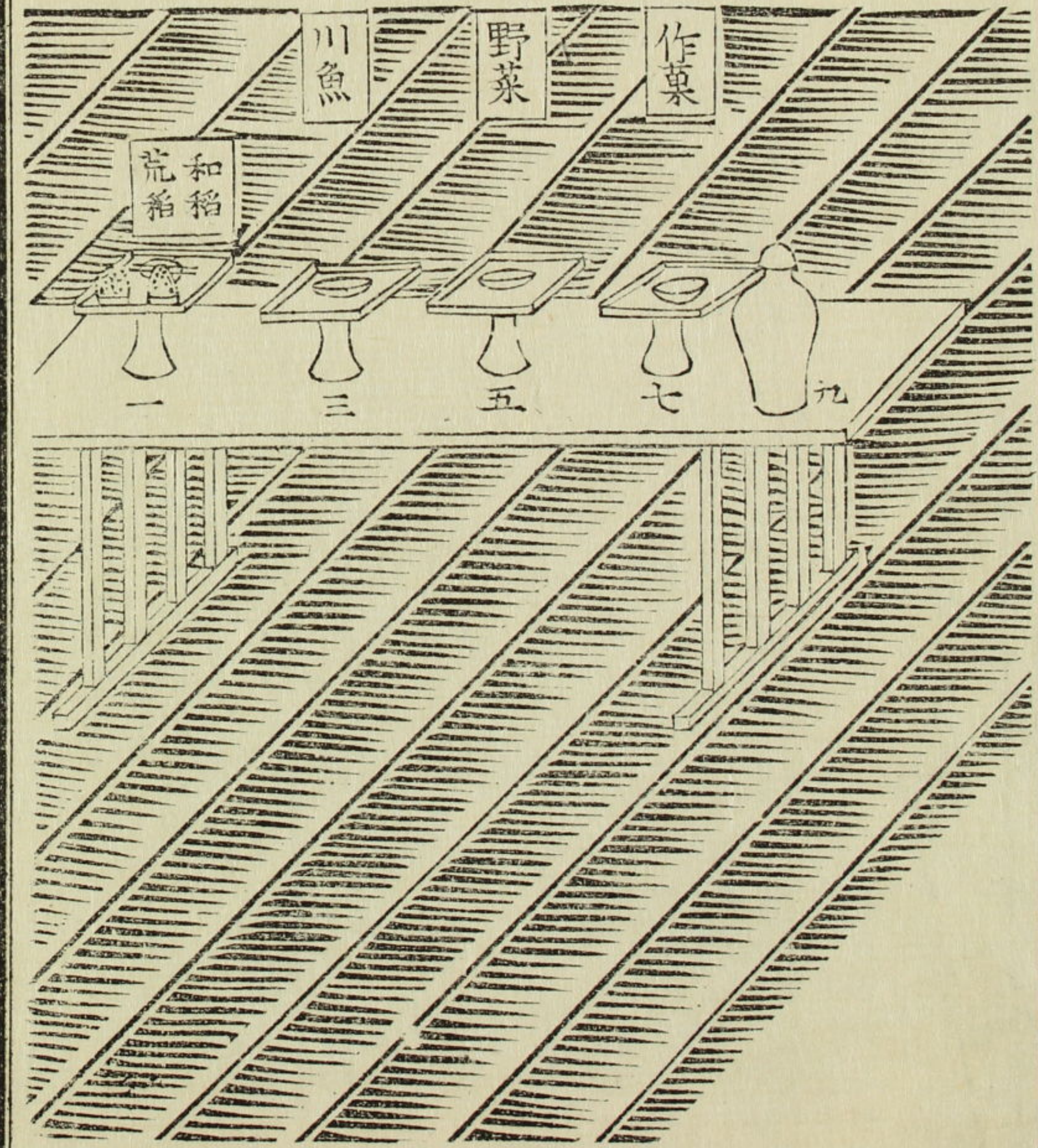


備ノ圖



神座

神饌獻



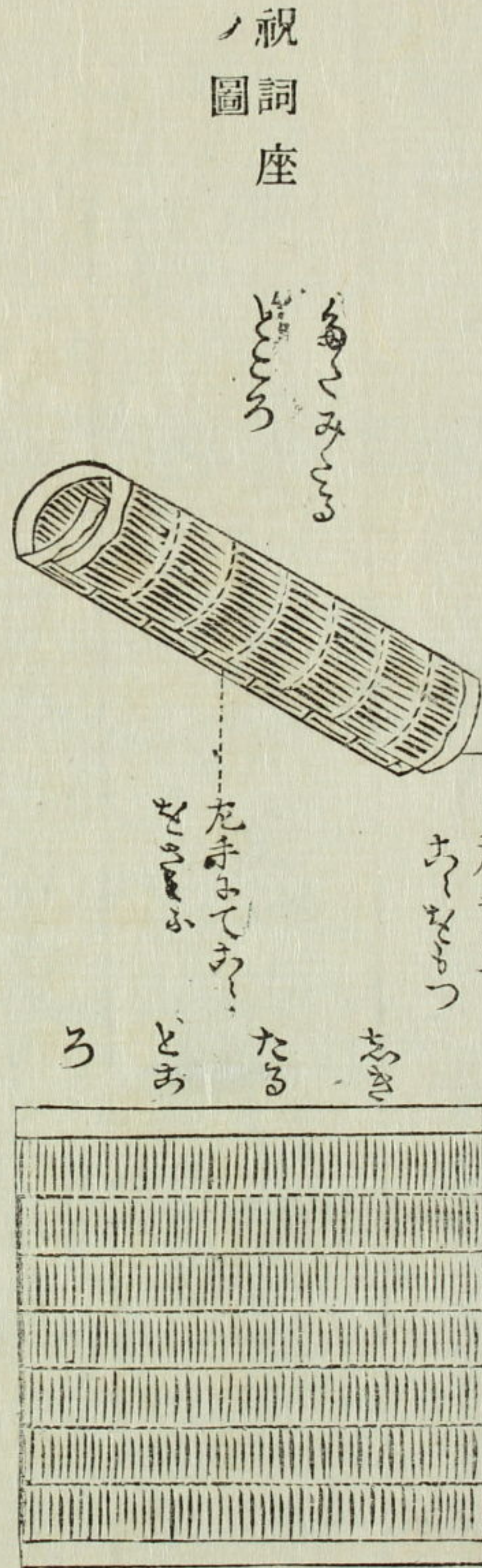


次 奉幣 次官

此は下に別に記す。

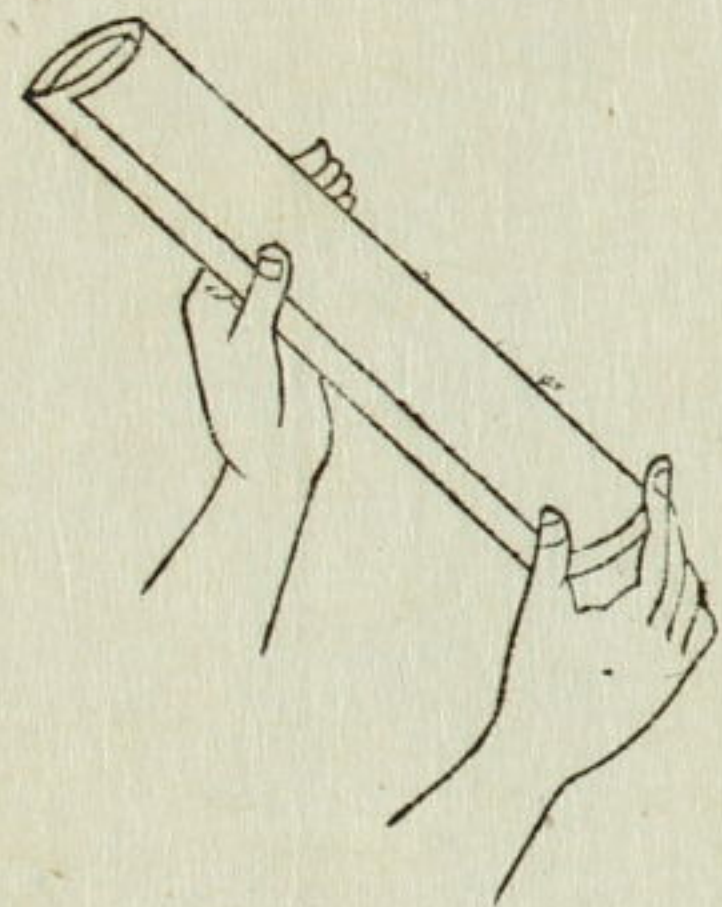
次 祝詞 長官

祭官一人。敷設敷役りまつ祝詞座を三折て。横にして。持出て。座して。竝に右左へ開けて敷き。一拜して退く。



長官一掛して起ち。祝詞座の前にて一揖し。膝行して座に著き。一揖す。祭官一人。後取といふ。祝詞を持ち。長官の左腋に座して。長官に附す。

祝詞ヲ  
持ツ圖



著座  
ノ圖



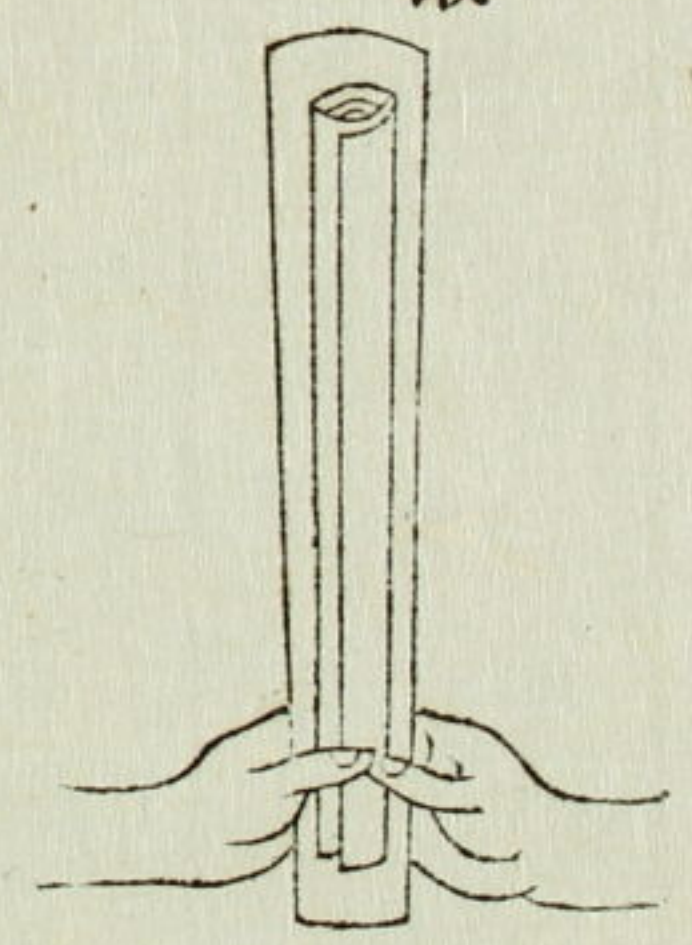
長官左手にて取り。笏しやくに持添へ。兩手よて捧たかげくす頭目より高くすべからず。二拜して。笏を右傍よおき。祝詞



を左、傍にて開き。正面に捧げて讀む。讀了りて左、傍にて巻き。笏に持添へて二拜す。祝詞を祭官に授け。祭官受取て笏と右、傍におき。手を二回拍ち。笏を取りて一拜し。一揖して膝退し。起ちて一揖し、御扉の傍に座して一揖す。

祝詞ヲ笏ニ取

添へ持ッ圖



次 長官玉串ヲ献テ拜禮

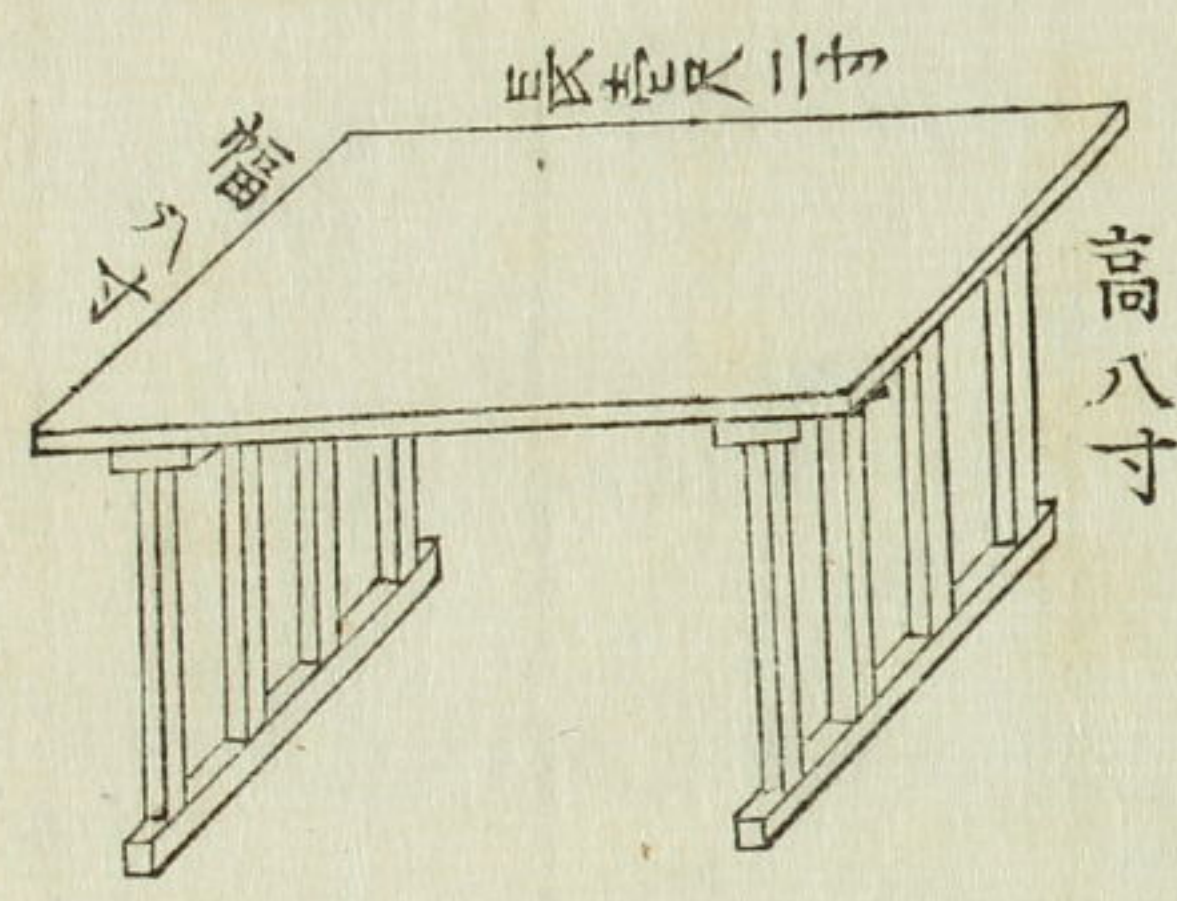
主典傍ニ就テ附ス畢テ本所ニ復ス

祭官 先ふ持出たる人。 祝詞座を撤却し。まゐ一人玉串案を持出て置く。

玉串の圖



玉串案の圖



長官一揖して起ち。玉串案の前三尺位の處にて。一揖して座す。祭官一人玉串を持ち。左、上手を右、手を長官の左傍に就きて。持替へて。左、上手を下、手にし。



右、手をす。長官に渡し。一揖して退く。長官一揖して受けとり。膝行し。持替へて。神の本を神前の方へ向け。右手にて案上におき。一拜して膝退し。一掛して起ち。御扉の傍に座して。一揖す。

### 次 次官以下同上

祭官一同に。一人。或は二三人の。おのゝ玉串を持ち。神前に進み。獻りて拜すること長官の所作におなし。二名以上の時は。すへて進退とも。右なる人に見做ふへ。了て祭官一人進み出て。玉串案を撤す。

### 次 次官以下神饌ヲ撤ス

此間 奏樂

陪膳手長の人々。一揖して起ち。先の位置に著き。一揖す。陪膳一拜して。後に奉りし瓶子より始めて。順次神饌案を撤却す。所作すべて獻供たるかへさ。畢て末座より。一揖して起ち。本座よ復して。一揖す。

### 次 長官一拜御扉ヲ閉ツ再拜拍手

諸員 平伏

畢テ下

此間 奏樂

長官一揖して。膝行して神前へ進み。一揖一拜



して。御扉を閉ぢ。膝退。二拜し。手を二回拍ち。一拜。一揖して膝退し。階を降り。最初の座より著せ。一揖し。諸員平伏。奏樂等は開扉の時の如し。

### 次 各一拜退出直會殿ニ著ク

諸員一同に著座のまゝにて一拜して。順次一揖して起ち。直會殿よりあり。座に著く。もし直會殿なくは。社務所など。便宜の所よて行ふべし。さて座よつかは。安座すべし。俗ふいふあり。な

### 次 主典饗ヲ居ウ

直會擔當の祭官。饗膳を諸員に座前へ居るなり。一同居え畢れ。長官以下箸を飯の上へ掛く。是を箸を立つと云

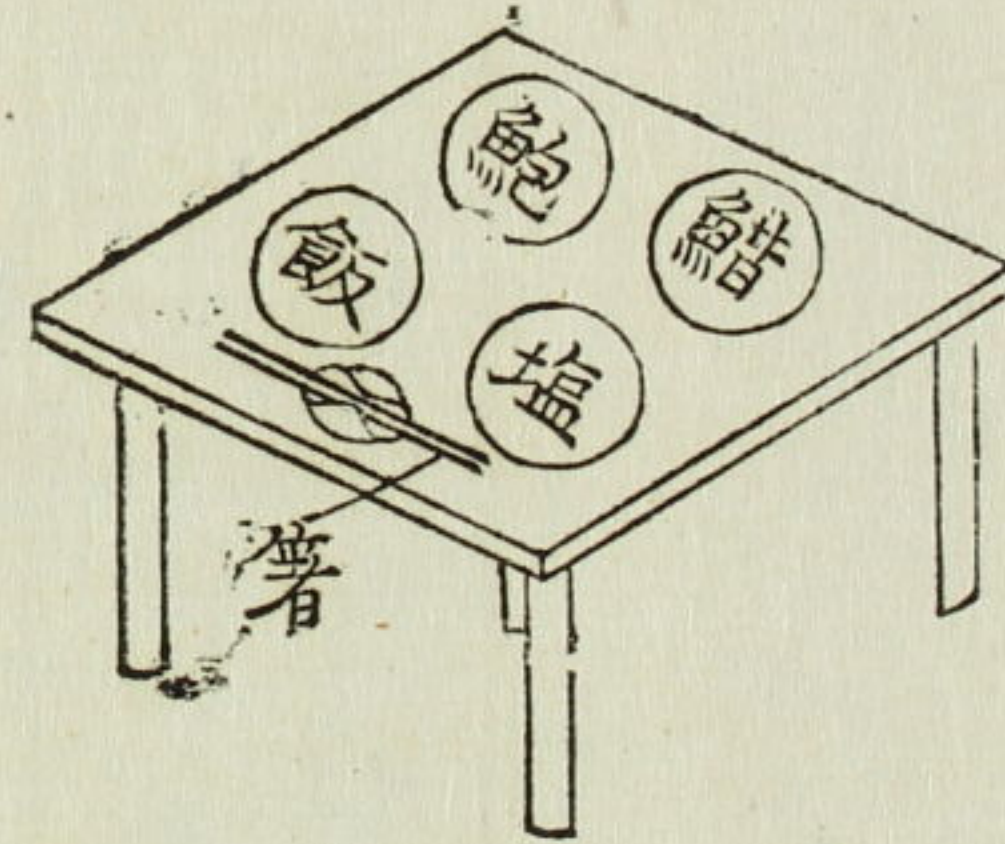
### 次 主典二勸盃

一人は酒杯を載せたる三方を持ち。一人は瓶子を載せたる三方を持ち出て。まつ長官の座前より就いて三方を居う。長官酒杯を取り。酒を受け。飲む。傍の器へしめく。元の如く三方に



かき。肴を喰ふ。勸盃の人。三方を次座の前へ居  
 う。次官酒杯を受け飲むこと上より同しくして。  
 順次に末席へおよぼし。飲食畢れり。箸を元の  
 云ふと。三献了て膳を引く。

饗膳の圖



臺四足机

鹽盛用土器ハハツ土器也  
 余ハ三度土器ナリ

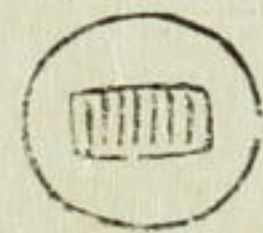
次退下

一同一揖し。順次に起ちて。直會殿を下る。

○奉幣次第

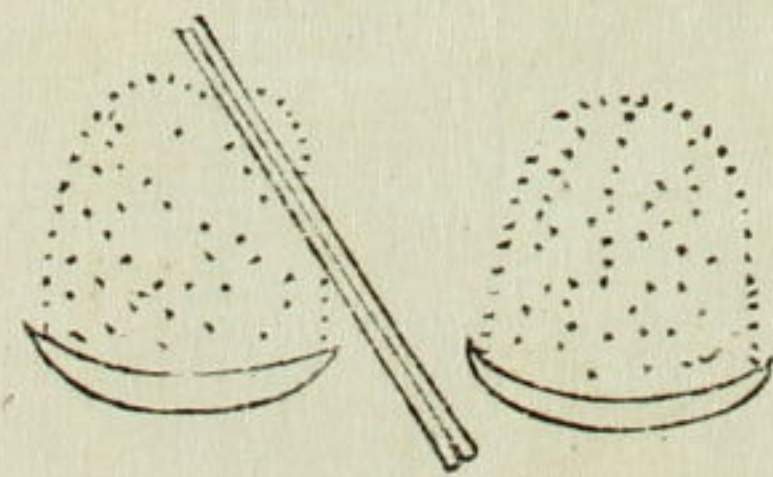
官祭よの金幣と奉らる、よよりて。別  
 よ作法なけれども。なほときたりのま

鰒鮓の圖



飯の形

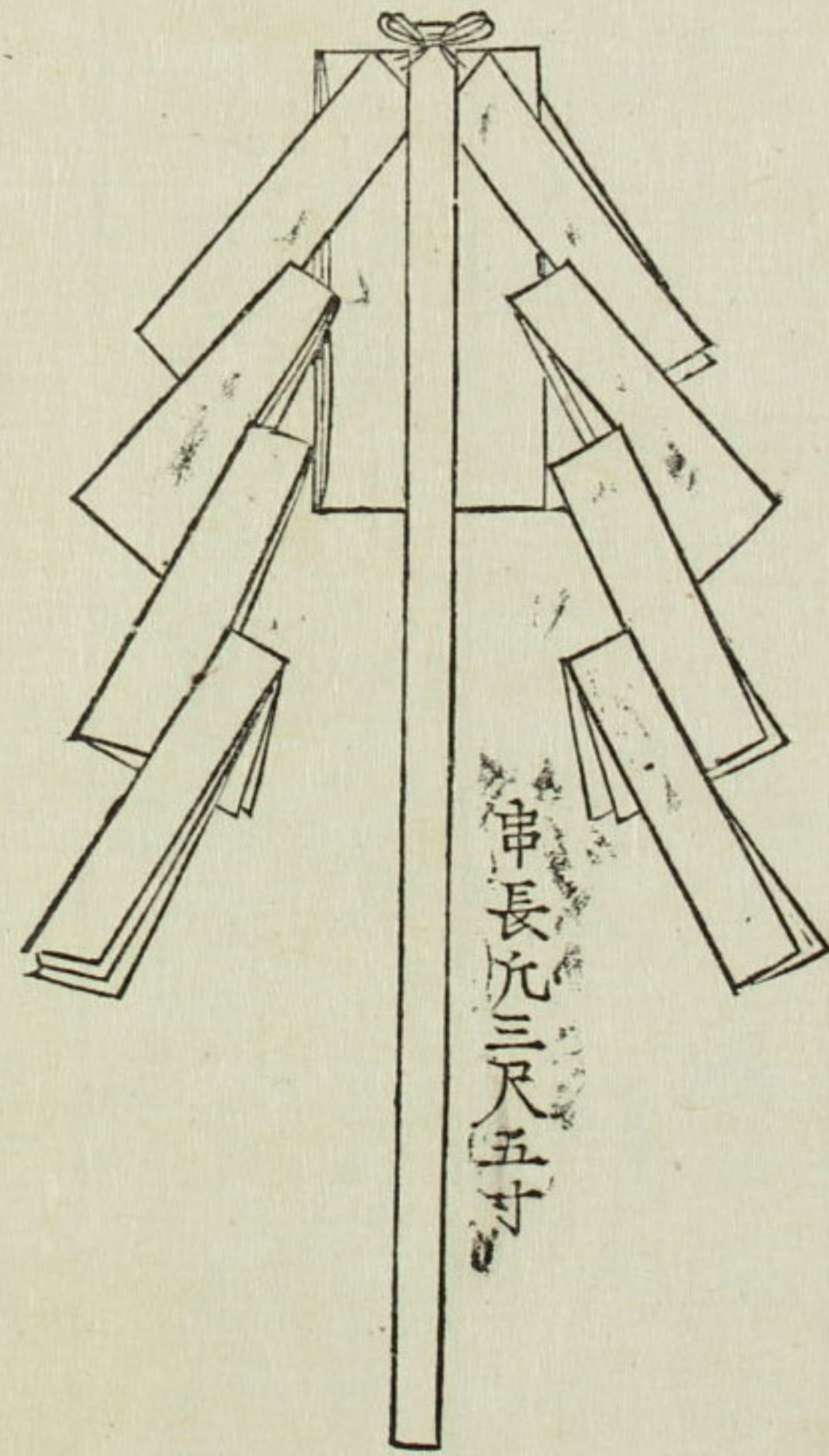
箸をかけたる圖





まゝ幣束を献らむ社にては。此の作法  
 によるへし。長官祭主なきは。次官奉幣  
 をなす。首座の主典幣使を勤む。されど  
 時宜よりて。長官より奉幣するも妨  
 なし。

幣の圖



先 一揖

敷設役。座と持出て敷くこと。祝詞座も同じ。さ  
 て奉幣役神前より進んで一揖す。

次 著座一揖

座前より左足より座し。膝行して。座の中央より  
 著きて一揖す。

次 二拜 乍居

居なかと再びたひ拜して。幣を受る前より一揖し  
 て。笏を右の傍におく。此時幣使幣串乃七分位



の處を左手よて執り。右手よて串の本を持ち  
左方へ斜よし。奉幣使の持つも奉幣使の左傍  
よ就き。居。龜幣串と持替へて授け。一揖して退く

著座ノ圖

奉幣役

幣使

### 次 執幣再拜

幣を受けて起ち。足と左右左と引れ。座して。幣  
串を左肩よ宛て立て。拜して本の如く幣を

### 次 祈請

乍持幣

執りて起ち。足を右左右と引きて座し。幣串を  
前の如く立て拜す。

幣を本の如く持直し。頭を少し垂れて。心中に  
祈念すべし。

### 次 再拜

起ちて。足を左右左と引きて。座して。上乃如く  
一拜し。又起ちて。足と右左右と引れて。座して  
一拜す。



次 幣ヲ使ニ附シ笏ヲ持テ一揖

奉幣役幣を持替へて。幣使に授えて。一揖以。幣使受けて起ち。神前へ進み。膝行して。神饌案乃前へ座し。持替へて。立て奉る。

次 使返祝詞

幣使奉幣役乃左、傍へ著<sup>居</sup>。手を一つ拍つ。

次 之レニ應ス

奉幣役笏を右、傍へおきて。手と一ッ拍つ。如此すること二反。幣使一揖して起ち。本座よ復す。

次 二拜

<sup>乍</sup>居

奉幣役笏を取りて。居ながら再拜す。

次 一揖起座

笏を取り。一揖して膝退し。右、足より起つ。

次 一揖退下

一揖して。本座よ復歸るなり。さて幣をば神饌と共に撤却し。また便宜の案上にれくも妨なし



○大祓次第

六月三十日。十二月三十一日。兩度も執  
行ふ式なり。

時刻社頭ニ祓ノ座ヲ設ク

其儀庭上中央ニ高机ヲ立テ祓物并大麻ヲ

置キ其前ニ祓詞ノ座ヲ設ク

祓物ハ。木綿一兩。代るは常の木綿布五尺。麻を以てす。  
用て代ゆ。



祭式摘要正誤

一丁オ七八行字はを

全九行閉はへ。はけ

三丁ウ六行右傍の右ハ左

五丁オ六行楫は楫下同オ

同七行右足の右は左。左足の左は右

九丁オ鹽水盃の圖



十一丁ウ一行一ハは上に

同八行做ハ做

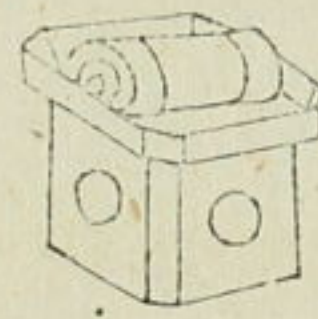
十五丁ウ墊は執

十六丁ウ二反ハ二度

十七丁オ五行笏を取りの四字誤

十八丁オ用ゆはふ

同丁ウ祓物圖



をお  
さ  
や  
う  
違  
へ  
り

但  
合  
見  
ル  
ヘ  
シ  
本  
書  
ト

右之通正誤ス



午後第二時神官祓ノ座ニ著ク

の着座  
圖

本殿

拜殿

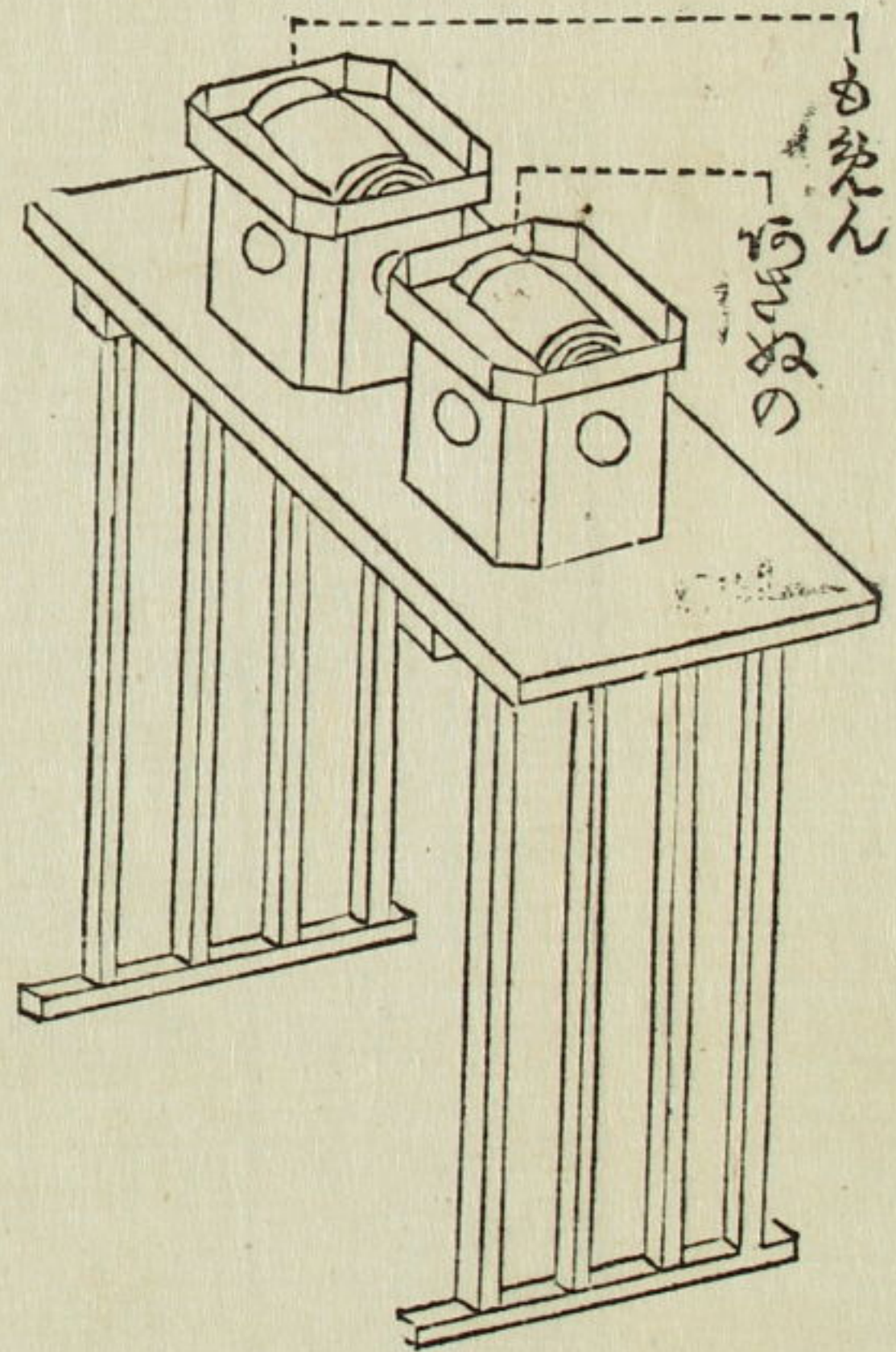
長官  
次官  
主典  
主典  
主典  
主典

之祓  
詞

物大祓

庭上にハ。倚子或は床几と設けて。祓の座とす。或は新薦を敷き。軾又は圓座を設る等。各地の便宜に任す。

祓物圖



大麻圖





次 長官神殿ニ昇リ御扉ヲ開ク

次 次官以下神饌傳供

次 長官祝詞ヲ奏ス

次 長官以下再ビ祓ノ座ニ著ク

次 長官一揖ス次官應之

次 次官祓詞ノ座ニ著ク一揖二拜祓詞讀了二

拜拍手打四ッ一揖本座ニ復ス

次 次官大麻ヲ取テ祓フ左右本座ニ復ス

次 祓物大麻捧持退場大河ニ向フ

豫めそれ人を定めおれて。祓物大麻を持ちて河邊ニ行記。細く切て流し棄てしむるなり。

次 長官神殿ニ昇リ候ス

次 次官以下神饌ヲ撤ス

次 長官御扉ヲ閉ツ

次 各一拜シテ退出



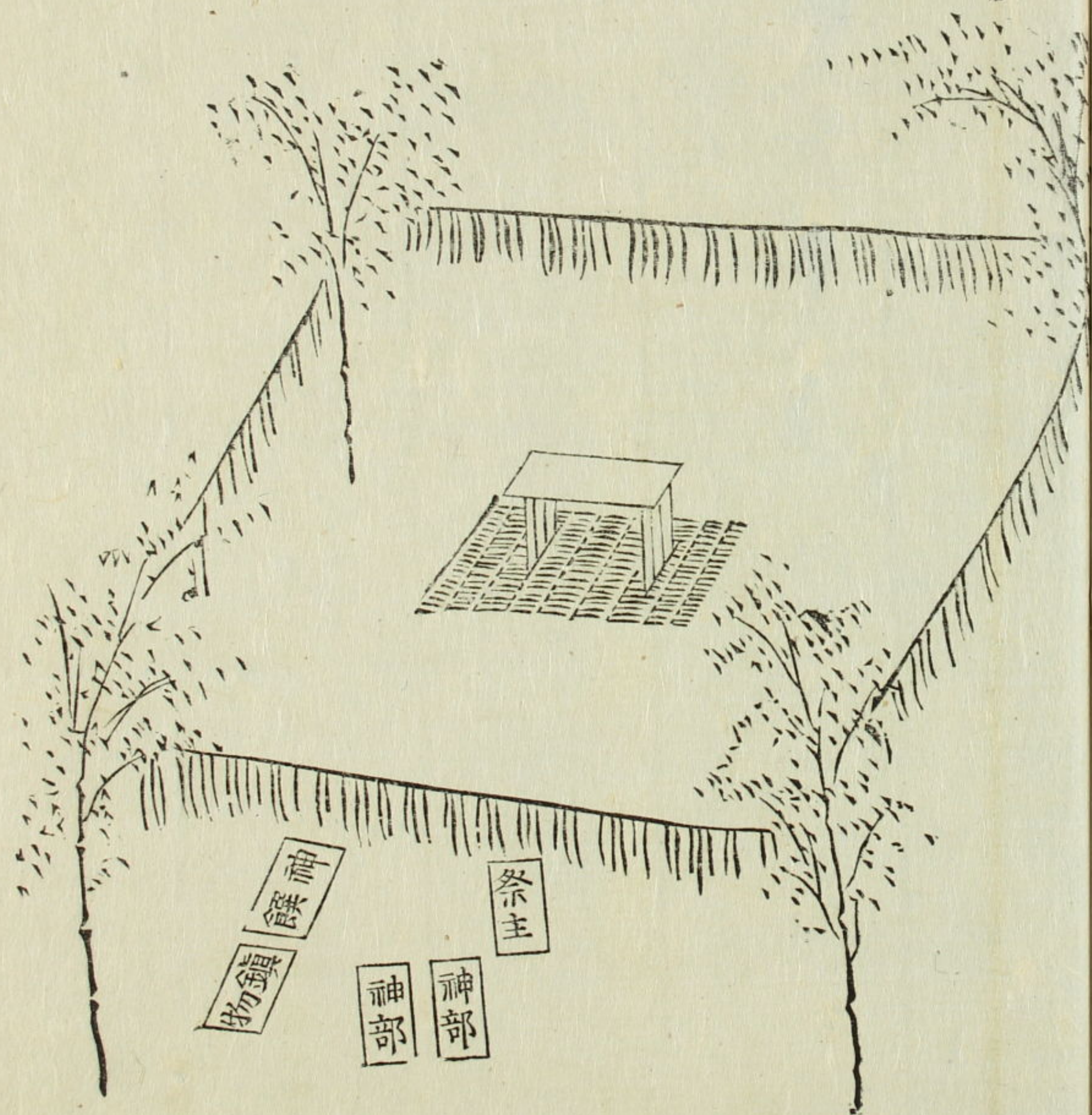
○地鎮祭次第

神社ハ更カリ。以テ家宅等を造リ建  
てむとシテ。新ニ地所を用ふる時ヨ行  
ふ式あり。

先祭場ヲ設備ス

其儀祭場ノ四隅ニ青竹ヲ樹テ注連縄ヲ引  
廻シ中央ニ薦ヲ敷キ高案ヲ設ケ便宜ノ所  
ニ神饌鎮物等ヲ辨備ス

祭場  
の  
圖





時剋神饌ヲ供ス

次 祝詞ノ座ヲ設ク

坐ニ著ク時一揖著キ了リテ一揖祝詞ヲ受  
ケ笏ニ添持テ再拜ス

次 祝詞ヲ奏ス

奏シ了テ再拜ス祝詞返シ了リテ拍手ニツ  
一揖シテ坐ヲ退ク

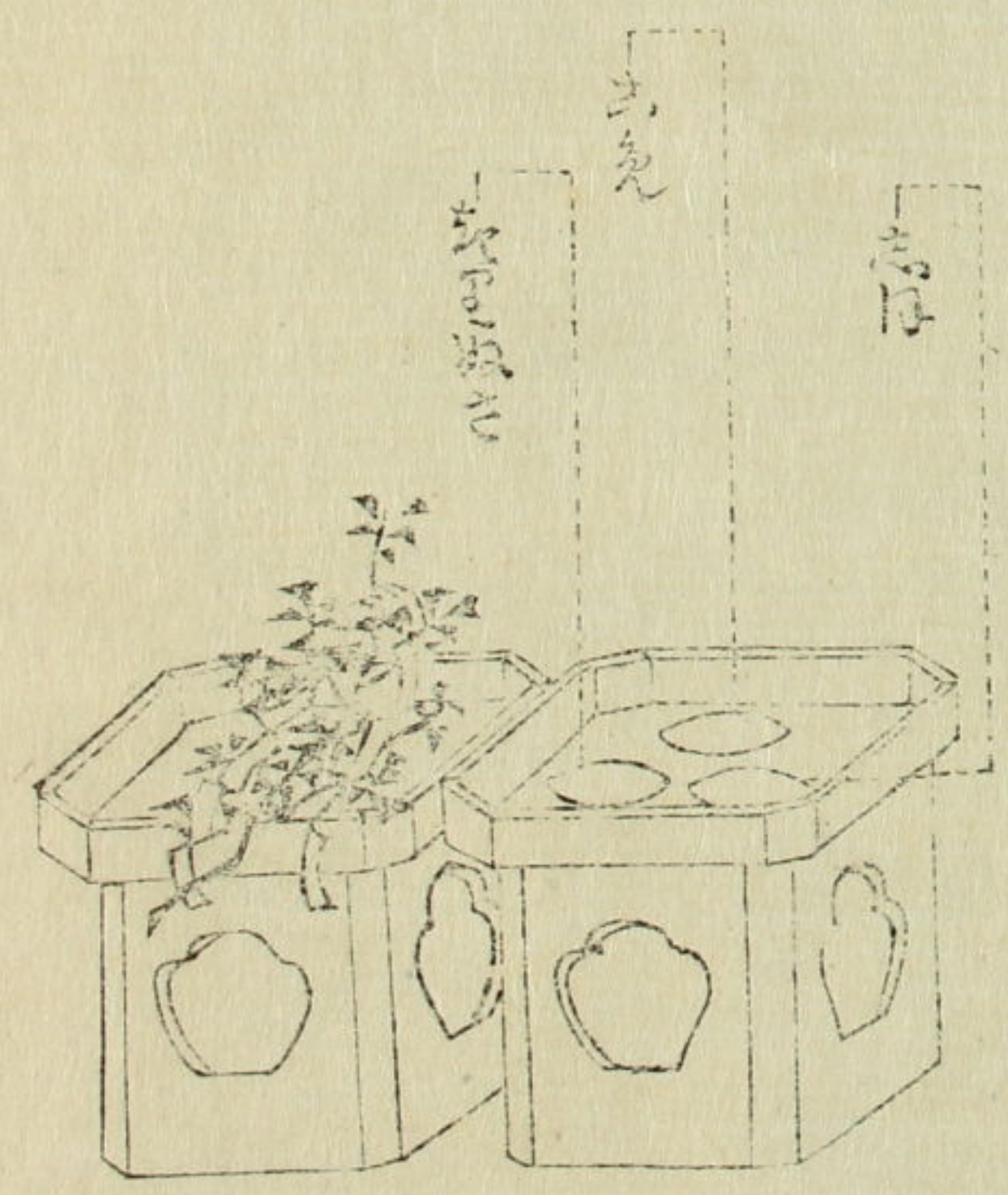
次 祝詞座ヲ撤ス

次 神饌ヲ撤ス

次 鎮物ヲ祭場ノ中央ニ設ク

神部二人鎮物ヲ持テ祭主ニ尾シ並ニ進テ  
之ヲ設ク各一揖

鎮物の圖





次  
鎮祭

其儀地所ノ四隅ニ向ヒ米鹽切麻ヲ散布シ  
木綿著ル賢木ノ枝ヲ執テ祓フ隨員二名鎮  
物ヲ持テ從フ

春は東南巽の隅より始めて。南西。坤西北乾。北  
東良と順次ニ鎮祭をへし夏は南西坤より。秋  
は西北乾より。冬は北東良より始む。米鹽切麻  
を散布するも。賢木を執て祓ふも。共ニ左右  
左よをへし。

次  
各退散

明治十七年一月廿五日しるしをへぬ



明治十七年一月二十四日出版版權御願  
同年二月十三日 版權免許

著述人

愛媛縣士族

木野戶 勝隆

東京牛込區下宮比町  
一番地寄留

出版人

東京府士族

平田 胤雄

同本所區柳島横  
川町十一番地



